

北海道鶴居村下幌呂遺跡 A 地点 出土の遺物について

沢 四 郎・西 幸 隆

1. はじめに

本遺跡は、昭和45年、釧路湖陵高校考古学部員によって発見され、同年9月21日、釧路第一高校考古学部員による踏査で、ここに紹介する資料が採集された。その後、筆者のひとり沢は、昭和47年7月9日、釧路湿原総合調査の一環としておこなわれた赤沼総合調査の際、本遺跡を踏査し、その概要について報告したところである(沢ほか1973)。その際、続縄文文化期および近世以降の遺物が追加されている。しかし、すでに発見されている石刃鍬文化期、東釧路Ⅲ式土器、縄文式土器などの遺物についても、今日まで未公表の状態にあった。

釧路湿原をとりまく台地には、これまで150箇所を越える遺跡が知られている。本遺跡発見の資料も、湿原周縁の先史時代を紐解く上において欠かすことのできない要素を含んでいると考えられ、ここに紹介し、若干の考察を試みたい。

なお、本遺跡は幌呂川の浸蝕によって一部が破壊をうけており、近い将来、正式な発掘調査を実施したいと考えている。

本稿を草するにあたり、資料の公表に快諾をいただいた、当時釧路第一高校考古学部に在籍していた山田哲朗君をはじめとする各部員、本遺跡を案内していただいた山本文男君、踏査に同行された北海道教育大学釧路分校教授岡崎由夫氏、標茶町郷土館豊原熙司氏に対し銘記して感謝したい。

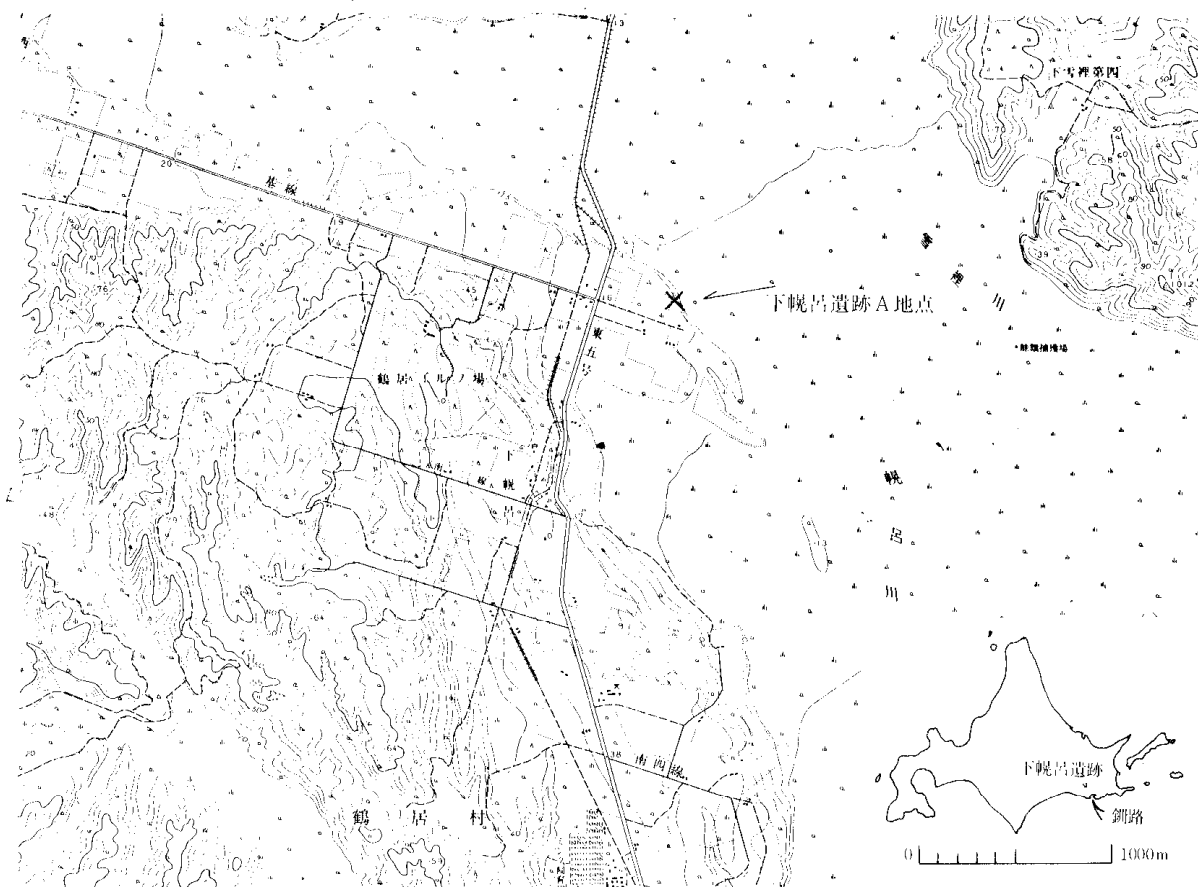
なお、本稿の執筆は主に石器を西が、土器を沢が担当し、討議を重ねまとめた。

2. 遺 跡

本遺跡は、釧路湿原西側の下幌呂市街地、即ち、湿原に東面した幌呂川右岸の標高10mほどの低地の河成段丘に位置する。背後に鶴居丘陵が連なり、同じく湿原の西側に位置する北斗遺跡(縄文式土器を出土する第Ⅰ地点)とはおよそ9.5kmの距離をもつ。また、東方4kmには湿原の中央部へむかって突出した宮嶋崎を望むことができる。幌呂川は、遺跡付近で1kmにわたって台地に接近して流路をとり、蛇行しつつ湿原を横断する形で、いくつもの小河川と合流し、新釧路川付近ではさらに雪裡川と合流して太平洋へ注いでいる。遺跡をのせる10~20mの台地は、細長く湿原にそって内陸部へ延び、中幌呂下では広範囲にわたる平坦な面を形成している。遺跡の南東側では舌状になだらかな傾斜で湿原に接している。しかし、最近おこなわれた幌呂川の河川改修で、遺跡に接していた流路もやや直線化し、一部の原形を失っている状態にある。

遺跡は、台地にそって細長く、およそ100m²の規模をもつものと考えられる。また、ここである本遺跡(A地点)から東西にそれぞれ300m離れて、B・C地点の2箇所の遺跡が確認されている。

先の踏査では、A地点から焼けた自然石、焼土の層がみつかり、自然遺物として古い時期



第1図 鶴居村下幌呂遺跡A地点

の獣骨、比較的新しいエゾシカの四肢骨、カワシンジュガイ等が出土している。B地点では黒曜石の剥片、C地点では遺物はみられないが住居址様の落ち込み、および焼土がみられた。付近から北筒Ⅳ式土器・続縄文文化期らしい土器片も出土している。近くには湧水地をもつ。

このような状況からみても、本遺跡が集落址としての性格をもっていたことは容易に頷けるところである。

3. 遺 物

(1) 土 器

本遺跡出土の土器は、すべて破片であり、完形土器はない。段丘崖線に沿って流路をとる幌呂川のはん濫原にむかって急斜面をなす、崩落土からの採集品であり、層位的に裏付けされた資料ではない。したがって、ここでは簡単な記載だけにとどめておく。A地点出土の遺物はⅤ群に分けられる。以下順に記す。本稿では文様の比較的名瞭な土器のみを図示した。

第1群土器(第2図、写真1、2)

条痕文、無文の平底鉢形土器群として一括されるグループ。全部で44点がみられ、本地点において最も多い数を記録している。色調は灰褐色、黄褐色、暗褐色などであるが、全体として灰褐色に統一されている。厚さは、3mm～8mmの間におさまる。7mm前後の数値が多い傾向にある。胎土に細砂礫、細礫を含むが、繊維混入例はない。

1～3、5は内外面に条痕文を有する例である。口縁部破片6、胴部破片29、底部2からなるものの一部である。6は胴部破片、2、3、5のように縦位に走る条痕が一つの特徴としてあげられ

る。ただし内面は横位につけられる。2の例にみられるように、条痕は口唇にもみられる。1は内外面とも横走する。口縁部破片断面図にもあらわれているように、口縁下のくびれが、これらの土器全体に共通したくせとして認められる。図示しなかったが、焼きのよい厚さ3mmほどの胴部破片3点に全面にわたり赤色塗彩のある例がある。これは底部破片（写真1左下端）にも認められ、同一個体のものである。4は無文土器である。暗褐色のざらざらした感じの土器である。無文土器は、さきの条痕文土器にくらべ口縁部破片3、胴部4と量は少ない。図示していないが、口縁部破片の他の2例は、口縁のくびれが条痕文と共通し、一見折返し口縁ふうのものである。無文、条痕文というきわめて特徴にとばしい土器であるが、一括遺物と考えてよさそうである。絡条体圧痕文は1例もない。

第Ⅱ群土器（第2図、写真3）

東釧路Ⅲ式土器の仲間である。口縁部1、胴部20を数える。厚さは4mm～8mmの間で、赤褐色を呈し、焼きはよく、かたい。繊維の混入はない。6は口縁部破片である。他はすべて羽状縄文のみられる胴部破片である。

第Ⅲ群土器（第2図、写真3）

総数34点ある。いわゆる縄文式の仲間である。他に縄文の底部破片1点がある。色調は暗褐色、灰褐色、赤褐色の三通りがある。内面は前期の土器一般にみられるように滑らかに調整されている。厚さは口縁部ではそれほどでもないが、口頸部から胴部、底部へと移行するにしたがい厚手となり、胴部の厚さは13mm～15mm内外である。そのため焼きは、内外面しかとどかず、中心部は黒色を呈している。胎土には繊維を多く含み、細礫もめだつ。縄文は、8～10に図示したように、横位に施文されているが、一条の巾は7mm、9mmの二種がみられ、文様の押しつけられた深さは3mm～3.5mmと深い。10は補修孔のある例である。11は縄文に近い原体の施文された底部付近の破片で、反り具合からみて、形態は丸底を呈したものと思われる。

第Ⅳ群土器

図示していないが、繊維を含む北筒式土器の破片1点、北筒Ⅲ式の破片1点がある。いずれも胴部破片である。

以上が下幌呂遺跡A地点採集の土器のあらましである。他に続縄文前半とみられる破片が出土している。特徴がはっきりしていないので割愛した。崖線沿いの崩落土砂、長さ10mほどのきわめて限られた範囲内の採集資料であるので、本来は層序関係を保っていたとみられ、特に第Ⅰ群、第Ⅲ群土器は、それぞれごく接近した年代のものと考えられる。第Ⅰ群土器は、本遺跡において最も多い数を記録した石器、石刃鍬文化の石器群と伴出関係にあったことは、これまでの当地方のすう勢からみて、ほぼ間違いないとみられる。

(2) 石 器

前項で記したとおり、本遺跡からは時間を異にした数形式の土器が発見されており、石器についても、層位的な裏づけをもたないところから、一部の資料については明確な位置づけが困難である。しかし、これまで、それぞれの伴出石器群として明らかな資料については個々に抽出して述べて行きたい。なお、図示資料のほかに石刃石核から剥離されたものを含めて87点の剥片が発見されていることをつけ加えておく。また、石質については1～38が黒曜石製、39が蛇紋岩製である。

石鍬（第3図1～4） 1～3は両面とも全縁に押圧剥離が施され、4については主剥離面の側縁部にわずかに加工が集中するにすぎない。いずれも平基式石鍬としての基部形態を備えている。

石 器 一 覧 表

図版番号	遺 物 名	長さcm	厚さcm	幅 cm	重量g	石 質	備 考
1	石 鏃	3.3	0.2	1.1	1.1	Obs.	
2	石 鏃	1.7	0.3	1.3	0.5	Obs.	
3	石 鏃	2.2	0.2	1.4	0.7	Obs.	
4	石 鏃	3.7	0.6	1.9	4.3	Obs.	
5	石 槍	6.2	0.6	2.5	9.4	Obs.	先端部破損
6	石 錐	2.9	0.5	0.8	1.3	Obs.	
7	石 小 刀	6.1	0.6	2.2	7.5	Obs.	
8	石 小 刀	4.4	0.6	2.1	7.4	Ods.	
9	剥片石器	4.6	1.1	2.9	11.8	Obs.	
10	石 刃 鏃	3.7	0.2	1.1	1.0	Obs.	
11	石 刃	3.5	0.3	1.2	1.7	Obs.	半折している
12	石 刃	1.7	0.3	1.5	0.8	Obs.	"
13	石 刃	2.7	0.2	0.7	0.3	Obs.	"
14	石 刃	4.3	0.5	1.7	5.4	Obs.	"
15	石 刃	3.5	0.5	1.7	3.4	Obs.	"
16	石 刃	3.4	0.6	2.1	5.9	Obs.	"
17	石 刃	3.8	0.7	1.2	2.4	Obs.	"
18	石 刃	3.4	0.5	1.0	2.3	Obs.	"
19	石 刃	2.5	0.3	1.6	2.0	Obs.	"
20	石 刃	1.8	0.4	1.4	3.8	Obs.	"
21	石 刃	2.8	0.5	1.8	2.6	Obs.	"
22	削 器	2.8	1.0	2.5	7.1	Obs.	
23	削 器	2.9	0.7	2.9	6.4	Obs.	
24	石 刃	4.5	1.0	1.8	7.8	Obs.	半折している
25	石 刃	4.5	0.8	2.7	10.3	Obs.	"
26	石 刃	3.4	0.6	2.5	7.6	Obs.	両端部破損
27	石 刃	4.7	0.7	1.8	5.4	Obs.	先端部破損
28	石 刃	2.3	0.7	2.0	3.7	Obs.	半折している
29	削 器	3.2	0.6	2.2	3.5	Obs.	
30	削 器	3.4	0.8	2.6	6.0	Obs.	
31	石 刃	6.4	0.8	4.4	21.8	Obs.	
32	石 刃	5.6	0.7	3.5	11.6	Obs.	
33	削 器	7.6	0.9	2.5	15.9	Obs.	半折している
34	剥片石器	3.8	0.3	1.8	2.4	Obs.	
35	彫 器	3.3	0.5	1.7	3.1	Obs.	
36	彫 器	4.9	0.9	2.4	11.9	Obs.	
37	彫 器	3.4	0.5	1.6	4.1	Obs.	
38	彫 器	3.9	0.5	1.2	2.3	Obs.	
39	磨製石斧	20.9	0.5	6.6	550.0	Serpentine	刃部および上端部破損

1～3の柳葉形、二等辺三角形を呈する石鏃が尖鋭な先端部を作出しているのに対し、2、4のそれは比較的緩やかな形状を示している。3のように二等辺三角形を呈する石鏃は、これまで釧路地方において縄文式土器に伴出することが知られており、本資料についても、第2図8～10に伴う可能性が強い。1に類似した石鏃については、湧別市川遺跡で石刃石器群に共伴して発見されているが、本遺跡において層位的な裏づけをもたないにせよ、なお検討すべき余地があると考えられる。

石槍（第3図5） 全縁に加工を施し、先端部がわずかに欠損している。側縁部は部分的に細かい加工が施されるが、裏面ではみられず、表面と同様な調整加工を示し、断面形はほぼ菱形を呈する。

石錐（第3図6） やや厚い縦長剥片を素材とし、全縁に加工が施される。裏面ではやや平坦な形状を示し、正三角形に近い断面形態を備えている。側縁部の磨耗痕については観察不可能であった。本資料を縄文式土器の伴出石器群として包含することには疑いのないところである。

石刃鏃（第3図10） 一点のみ発見されている。主剥離面では右側縁のわずかな部分を除いて二次加工が施され尖鋭な先端部を作出している。表面は二稜三剥離面をもち、二次加工は施されない。擦痕については両面ともに認められない。

石小刀（第3図7、8） いずれも先端部付近に抉入をもち、7のそれは比較的不定形だが本類とした。石小刀としての分類に難はあるが、石刃鏃文化の石器群の中にはこれまでに抉りをもついくつかの石器が発見されている。異った用途としては湧別遺跡において、石刃鏃の基部付近に両側縁から抉入を施した資料が3点あり、同例は湧別市川遺跡にもみられる。さらに石刃の上端部付近に両側縁から抉入をもつ資料は湧別遺跡で1例、東釧路遺跡第II地点で5例発見されている。本資料の中では、8のそれは円礫の原石面を残しており、共伴関係にあると考えることは困難であるが、石小刀としての形態を石刃鏃文化の中に求めることはあながち否定できないところである。

削器（第3図22、23、29、30、33） 22、23は一方の側縁部から加工を施し、裏面においては第一次加工面を残しており、不定形な剥片を素材としている。23の主剥離面では、表面に加工が施された左側縁に集中して、縦、横走る擦痕が観察される。29、30は、同一箇所へ傾斜した刃部を作出しているが、30のそれは、およそ60°の傾斜した刃部形態を備えている。33は石刃の両側縁から二次加工を施し、下端部で尖鋭な形態をもちつつ、やや傾斜した刃部を作出している。

石刃（11～21、24～27、31、32） 石刃石核から剥離されたのみで、二次加工が施されず、いわゆる折損した状態で石器としての用途を備えたものと、若干の二次加工が表面の側縁部に施されるものがある。

19の剥片的な資料についても本類に含めた。いずれも石刃としての完形のものはないが、わずかに32にみられる幅広い石刃に一例を求めることができる。しかし、従来発見されている石刃鏃文化の石刃石器群の中には、31を含めてやや大形の幅広い石刃はきわめて稀な存在といえよう。ちなみに、前後する時期に類例を求めると、縄文前期の石器群の中にしばしば散見されるが、石質に異りをみせ流紋岩質であることが多い。

石刃にみられる擦痕は、明らかなものについては実測図の中にその方向を示した。15、16のように側縁部にそって縦走る擦痕がみられる。他の資料については明確に捉えることが困難であった。

彫器（第3図35～38） シングルブロータイプの彫器が発見されている。いずれも、側縁部から1ないし2度の打撃を加えて彫刀面を作出しており、36では幅広いグレーバーファシットをもつ。グレーバーにみられる擦痕については、おおよそ36に示したが縦走あるいはやや斜走して観察さ

れ、きわめて顕著にみとめられる。同例の右側縁部の主剥離面を拡大したものを写真5に示した。図示していないが、38では主剥離面に横走する擦痕がみられ、縦走するものは認められない。いずれも擦痕が顕著であり、グレーバーそのものについての検討が可能な資料とされよう。

剥片石器（第3図9、34） 9は円礫面の一部を残し、一方の側縁部に細かい加工を施し刃部を作出している。本例は、石刃鏃文化の所産と考えるには困難である。34は、左側縁部上端から打撃を加えた剥離面をのぞかせているが、打撃面もさらに剥離されており、稜線ももたない。石刃石核から剥離されたものと考えて差し支えない。

磨製石斧（第3図39） 石斧は1例のみ発見されている。蛇紋岩質。作出過程での擦痕が斜走して観察される。刃部の一部を破損しているが、断面でも明らかなように両刃形態を備えている。

4. 考 察

本遺跡出土の遺物は、前述したように発掘資料でない。したがって、当然資料としての限界を有する。だが、限られた極めて狭い範囲内からの出土例ということからすれば、幾つかの時期にまたがる資料とは言え、それらは採集地点における層位を反映しているものとみなすことができる。ここでは、二・三の気付いた点について記し、考察としたい。

第1群土器は最とも出土量が多く、第Ⅲ群土器とともに本遺跡を特徴づける資料である。これらは、条痕文と無文土器というように大きく二つに分けられる。主体をなす土器は、条痕文土器群である。胎土に繊維の混入をみず、口縁の断面形態、口頸部の若干くびれ気味の「くせ」など共通する特徴を備えており、一括遺物に近い内容をもつたものである。これに特徴を同じくする土器は、東釧路遺跡第Ⅱ地点(沢1968a)、標茶町二ツ山遺跡第Ⅰ地点(沢1968b)においてそれぞれみられた浦幌式にともなう条痕文・無文土器群がある。それらの土器はいずれも石刃鏃文化期の石器群とともに出土したものであり、土器組成の上で、条痕文土器群が主体を占めるといった傾向をも同じくしている。したがって、第Ⅰ群土器は、本地点にみられた石刃鏃文化期の石器群として捉えられる性質のものであることは疑えない。しかし、東釧路遺跡第Ⅱ地点、標茶町二ツ山遺跡第Ⅰ地点では、浦幌式とした口縁部にみられる絡条体圧痕文土器および女満別式型押型文土器(大場・奥田1960)やそれに類する円形の刺突文土器などがあり、胎土に少量の繊維を含む土器群がかなりのパーセンテージを占めるといった側面をもつが、本遺跡ではそれらのすべてを欠いている。これは石器群の組成にも現われているように、出土地点の性質に由来する資料不足とみなすことができよう。釧路地方における石刃鏃文化期の石器群の編年的位置は、これまでの調査例からすれば、テンネル式、浦幌式の時期で、その存続年代は比較的短かいと言う従来の見解を変える必要はないように考える(沢1968b、西1972)。

第Ⅱ群土器は東釧路Ⅲ式土器である(河野・沢ほか1962)。本型式を出土する遺跡は、釧路湿原周縁の台地に濃密に分布する。釧路湿原の北西側では、釧路市大楽毛遺跡第Ⅲ地点、同Ⅳ地点(加藤1969)、同北斗遺跡第Ⅰ地点(註1)などが知られていたが、ここに本遺跡を追加することができたものである。

第Ⅲ群土器は、一点の粗雑な縄文土器片を除いてすべて縄文式土器である。この縄文式土器は古くから登場し(註2)(河野1935)、本道の石狩―苫小牧を結ぶ低地帯を前後する一帯から、北東部に広く分布するものであるが、西南部にも出土例がある(註3)。これまで、層位的に良好な遺跡に恵まれず、編年的な位置、型式内容など不明な点が少なくなかった。河野広道博士は、網走市大

曲洞窟の所見から、縄文尖底土器よりも古いとされたが（河野1955）、その後の調査では必ずしも明確ではなく（児玉・大場1955）、さらに逆の層位がみられている（大場1967）。報告された多くの遺跡では、繊維を含む縄文尖底土器群の出土が伝えられている。このようなことから、綱文式は、細い縄を巻きつけたような所謂綱文の施文された土器のみの単純な組成を持つものでないらしいがその実体については、明らかでなく、型式としての存在すら危ぶまれている（桑原1969）。

綱文式の編年的な位置づけについては、縄文早期とするものと、前期とするものがあるが、後者の年代観が一般化しつつある。前述の大曲洞窟以外の層位的な出土例からみると、静内田原遺跡では住吉式、田原A式、同B式よりも上層から縄文尖底土器とともに出土し、同一層内において縄文尖底土器が若干上位に出現率が高いと報告されている（藤本1958）。道北の旭川市東旭川町上兵村299、同日ノ出293などの遺跡では、平底の無繊維の押型文土器よりも下層から綱文式土器群が出土している（佐藤1960）。また扇谷正康氏の調査された苫別遺跡では、A地点第3層下縁より東釧路Ⅳ式に対比される苫別式土器が、上縁より綱文式と厚年の繊維を含む縄文土器が出土している（扇谷1960）。さらに下大樹遺跡では、縄文早期の平底の土器群よりも上層に綱文式がみられ（大場・棚瀬1965）、池田遺跡C地区では、静内中野式に類似する土器の包含層下層から綱文式の出土をみている（山崎1972）。

釧路地方の綱文式は、これまでに浜中町茶内出土の一片が知られていたが（註4）、最近音別町チノミ（註5）、釧路市大楽毛第Ⅳ地点（註6）同北斗遺跡第1地点などが知られるようになり、一時期を劃して存在することが明らかになりつつある。北斗遺跡第1地点では繊維を含む縄文尖底土器（底部は未検出）と思われる土器とともに出土し、これらの時期の墓塚5例が確認されている。層位的には北筒式土器群より古く、東釧路Ⅲ式土器より新しいという結果を得ている。

以上のようなことから、本遺跡にみられる第Ⅲ群土器、つまり綱文式土器群は、東釧路Ⅳ式よりも新しく、平底の押型文土器群、縄文尖底のある土器群よりも古く位置するものと見做すことは可能である。道南の春日町式とは、併行かそれよりも新しいとみることも可能であるが、これを確かにするためには、北海道における縄文前期に位置する土器型式の整理が必要であろう。道東に広く分布する押型文尖底土器との前後関係であるが、これについては、春日町式の一部に対比される亀田郡尻岸内町大潤遺跡でトドホッケ式に一種の押型文が伴っていたこととも関連して、非常にむずかしい問題を抱えこんでいる（吉崎1965）。釧路地方において両者が同時性をもち混在したと考えることは至難であり、おそらく時間的に前後関係を有することは確かである。中田幹雄氏は、綱文式（大曲）の編年的位置を温根沼式（児玉・大場1956）よりも新しく、静内中野式や朱円式よりも古いとする試案を発表されている（中田1967）。現状では妥当な見解とされよう。

石器群については、共伴関係が明らかなものとして、綱文式土器に伴うと考えられる石鏃、石錐を、石刃鏃文化期の所産として石刃鏃、石刃、削器、彫器をそれぞれ抽出することができた。石槍石小刀、磨製石斧については、石刃石器群をのぞいたいずれかの時期に求められるとみてよい。石刃石器群が量的に多くを占めたが、発掘資料でないところから、その組成については積極的に論及できない一面をもっている。例えば、石器製作址としての裏づけをもつ多くの剥片（石刃石核から剥離されたもの）が発見されていながら、石刃石核を欠いている。さらに、石刃石器群として普遍的な石錘、砥石、石鋸、磨製石斧、装飾品なども発見されていない。石器群にみられるこのような様相は、本遺跡が生活址としての性格をもちながら、セットとしての石器群が出揃っていないと理解しても不自然ではないだろう。そこで、断片的な資料としての位置づけのもとに、本遺跡の石器群

について視てみよう。

縄文式土器に伴出する石器群については、本遺跡から連なる湿原西側の台地に位置する北斗遺跡第1地点から、比較的まとまった資料が得られている。ここであげた二等辺三角形を呈する石鏃、石錐を含めて、やや小形の石槍、下端部で直線的な刃部を形成する石小刀、搔器、比較的厚身の磨製石斧、装飾品などで、いずれも墓域中から発見されている。本遺跡では東釧路Ⅲ式土器の発見例もあるところから、磨製石斧、石槍、石小刀、についても、上述したように、これらの土器群のいずれかに伴出するとみられる。しかし、縄文文化期の遺物の発見例があるところから、本遺跡においては、少なくとも4つの石器群を考えなければならない。

その他の石鏃についても、石刃石器群を含めて直接的に伴出関係を論じる根拠は全くない。しかし、湧別市川遺跡（木村1973）における例、および朝日トコロ貝塚（駒井1963）におけるG石器群の中には、石刃石器群に加えるには疑問の余地を残すとしながらも、わずかに石鏃の存在することが報告されている。むしろ、今後において、縄文早朝の平底土器に伴う石器群との関係を考える上で興味ある問題といえる。

さて、石刃石器群については、ここで多くを論じる要素はない。だが、数少ない石器群の中で比較的彫器が多いこと、あるいは削器のあり方からみても、東釧路遺跡第Ⅱ地点、（沢1968 a）、標茶二ツ山遺跡第Ⅰ地点（沢1968 b・1969）とは、その組成において際だった差異をもたないものとする。すでに朝日トコロ貝塚の報告者は、石器群における各々の遺跡の様相からみて、同種の文化における2つの階梯の存在を示唆している。ひとつは女満別豊里（石刃）遺跡第Ⅱ地点（大場・奥田1960）、朝日トコロ遺跡、東神楽14号遺跡（斉藤・岩谷1960）のそれであり、他のグループは湧別遺跡（児玉・大場1958）にみられる石器群である。東釧路遺跡第Ⅱ地点、標茶二ツ山遺跡第Ⅰ地点、あるいは本遺跡の石器群については、むしろ後者に含まれるべき組成を示している。彫器、削器の多出あるいは欠如に限らず、石刃鏃、石刃について視めた場合でも、若干の変容がみられる。石刃鏃は、本来の定形的な形状を示すものとそれを含みながらも多様化した形を備えるグループとがある。湧別遺跡、湧別市川遺跡、東釧路遺跡第Ⅱ地点、標茶二ツ山遺跡第Ⅰ地点などからは基部付近の両側縁から抉入をもつもの、あるいは幅広い膨らみをもつグループが発見されており、石刃についても石小刀的な形態をもつものがある。これらの石器は、前述した後者のグループに多くみうけられ、東神楽14号遺跡、川東羽田遺跡（戸沢・鶴丸1968・1971）のわずかな例を考慮しても、単に偶然として処理できない側面をもっていると考えられる。

いずれにせよ、本遺跡の断片的な資料から石器群の組成を各々の遺跡に求めて、ここで論断するには、時期尚早の感がある。しかし、客観的にみても、東釧路遺跡第Ⅱ地点、標茶二ツ山遺跡第Ⅰ地点における石刃石器群とは大きな隔たりをもたないものとする。この点を含めて後日、正式な発掘調査を実施した段階であらためて論及したいと考えている。

釧路湿原北西部に接する鶴居村は、旧釧路川の支流をなす久著川および雪裡川とその枝川があるオンネナイ川、チルワツナイ川、幌呂川などの大小さまざまな小河川が入りこみ、それらの川筋に沿って遺跡が展開している。だがこの地域の遺跡については、筆者の一人沢が踏査して以来（沢：1960）、本格的な踏査はおこなわれていない。

それ以外は釧路市立郷土博物館による釧路湿原に総合調査の一環として、キラコタン崎、宮島崎付近の遺跡が踏査され、報文がもたらされたに過ぎない（沢1971）。またこれとは別に1972年から釧路第一高校考古学部の諸君により、温根内川流域の踏査が継続しておこなわれているが、交通不便

な地域であるということも重なり、大部分は未踏査であり、その全ぼうは把握されていない。そうした中で、本遺跡が追加されたということは、今後のこの地域の先史文化を探る上において意義あることと思われる。将来、さらに踏査を重ね、釧路湿原周縁の遺跡の正確な位置づけをおこなっていききたい。

附記

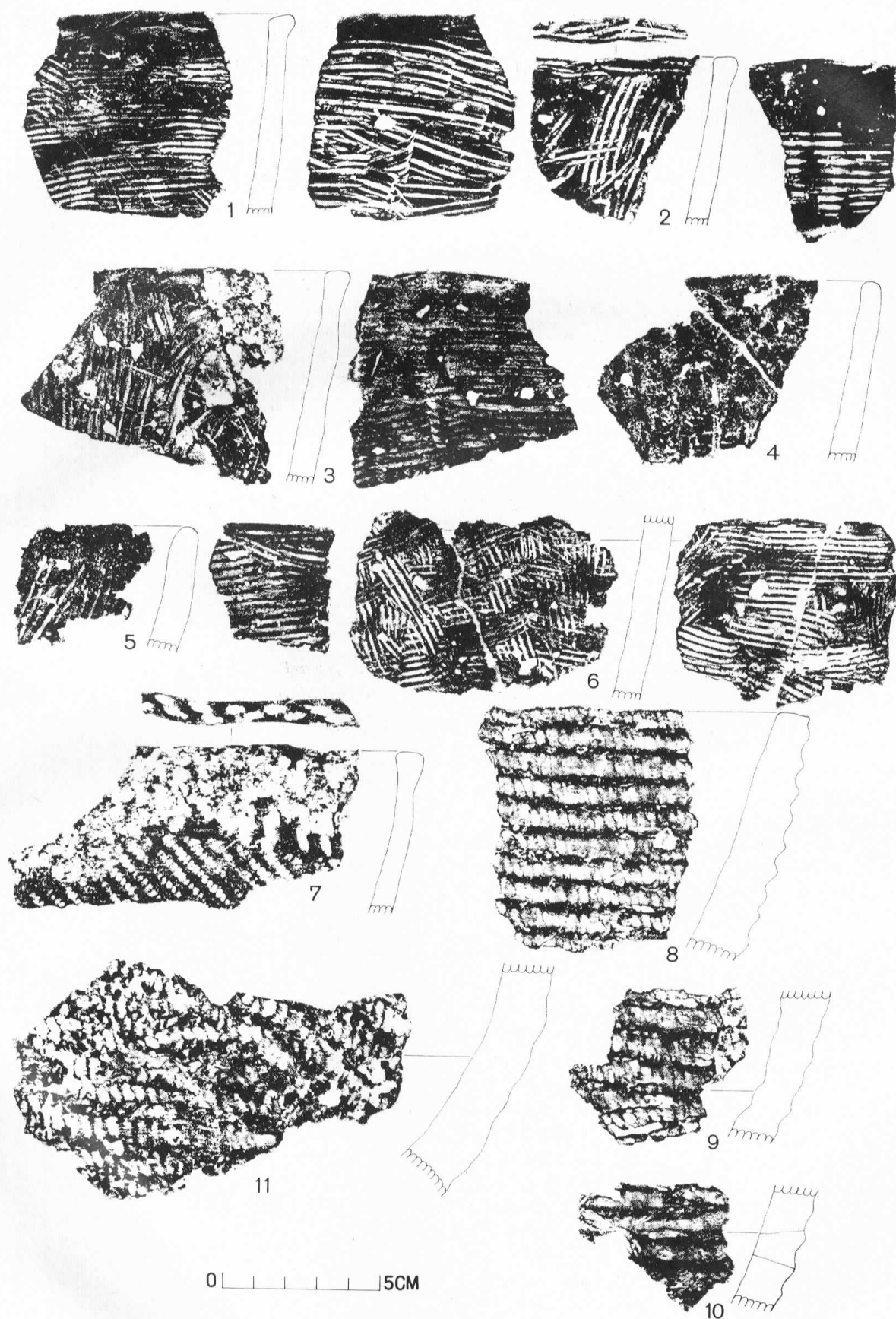
本稿をまとめるに当たり、縄文式土器について、大沼忠春、松下亘の両氏のご教示を得た。記して厚くおん礼申し上げたい。

註

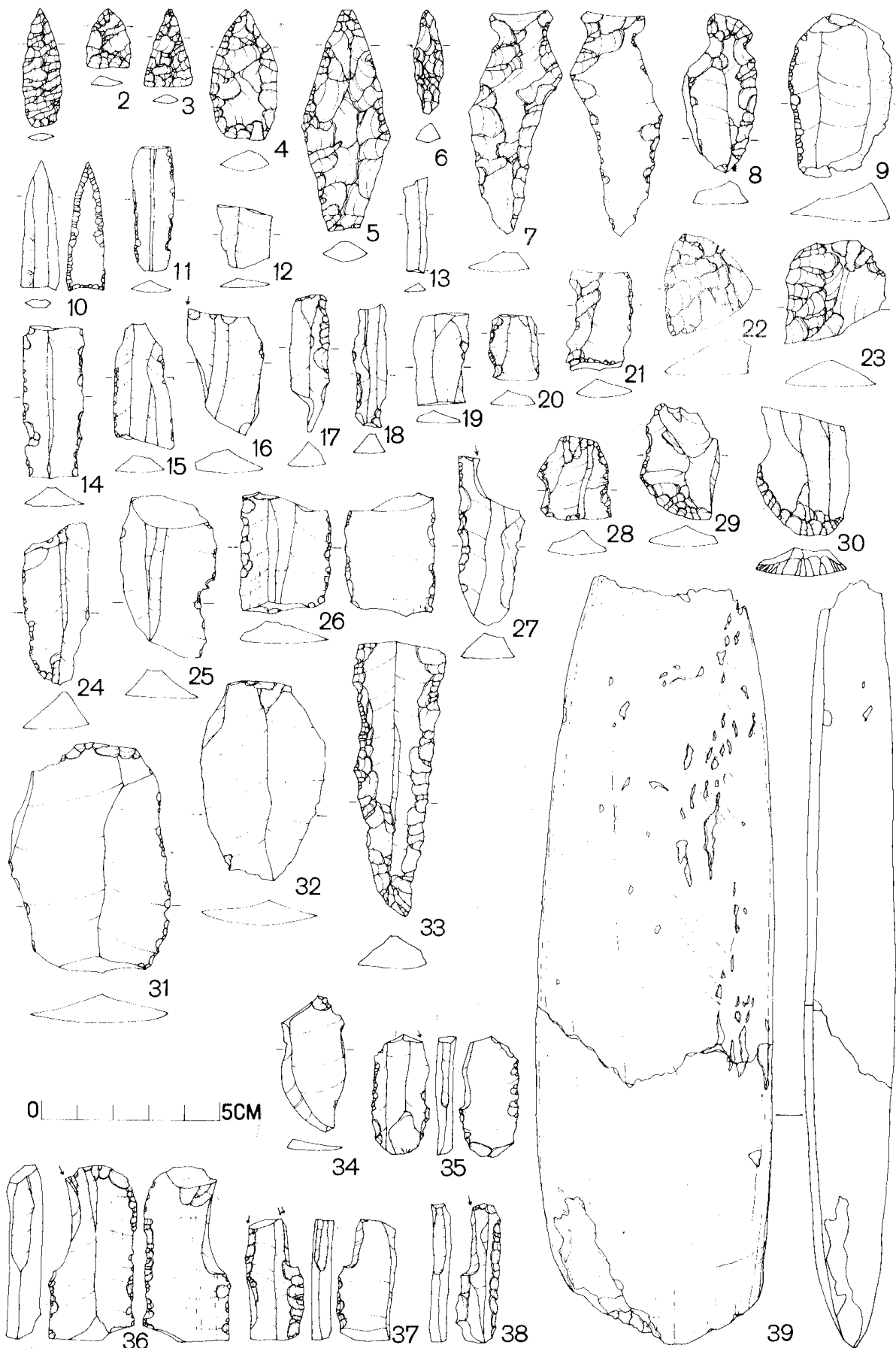
- 註1 北斗遺跡は釧路市の北西の湿原に面し、ほぼ2.5kmに亘り竪穴群が略Ⅷ群に分かれて分布する。このため、第Ⅰ～第Ⅷまで区分し呼称している。昭和47年の地形測量に引続き、昭和48年には第Ⅰ地点と第Ⅷ地点の一部の発掘を行い、第Ⅰ地点からは東釧路Ⅲ式、縄文式、縄文尖底土器（底部未検出）、北筒式土器群、続縄文式土器などが出土することが確認された。表面採集の資料では、石刃鏃に伴なうとみられる石刃が一点採集されている。
- 註2 北海道原始文化聚英第6図版に、1厚手縄紋残片千歳出土として図示されている。
- 註3 大沼忠春氏のご教示によると、北桧山町大谷地遺跡出土資料（北桧山公民館蔵）があり、これについては佐藤隆広氏撮影の写真を実見している。またここでは、道東にみられる押型土器と春日町式土器も出土しているが、層位的な前後関係は不明である。
- 註4 釧路市立郷土博物館所蔵資料による。
- 註5 音別町公民館の展示ケースの中にチノミ台地出土として保管されている資料を実見した。
- 註6 釧路第一高校考古学部の小西雅徳君により、1点の縄文式土器片が採集されている。

引用参考文献

- 扇谷正康（1960）「北海道日高国苫別遺跡について」上代文化第30輯
- 大場利夫・奥田 寛（1960）「女満別遺跡」女満別町教育委員会
- 大場利夫・棚瀬善一（1965）「大樹遺跡」大樹町教育委員会
- 大場利夫（1967）「北海道地方の洞穴遺跡」日本の洞穴遺跡 日本考古学協会洞穴調査委員会 平凡社
- 岡崎由夫・沢 四郎ほか（1973）「温根内付近の遺跡踏査」釧路博物館報Ⅷ220
- 加藤晋平編（1969）「釧路市大楽毛第4地点の発掘調査」釧路市教育委員会
- 木村英明（1973）「湧別市川遺跡」湧別町教育委員会
- 桑原 護（1969）「北海道縄文時代中期の文化」古代文化22-3・4
- 河野広道（1935）「北海道石炭時代概要」ドルメン4-6
- 河野広道（1955）「先史時代史」斜里町史
- 河野広道・沢 四郎（1962）「東釧路」釧路市教育委員会
- 児玉作左衛門・大場利夫（1955）「網走市大曲洞窟出土の遺物について」北方文化研究報告第10輯
- 児玉作左衛門・大場利夫（1956）「根室国温根沼遺跡の発掘について」北方文化研究報告第11輯
- 児玉作左衛門・大場利夫（1958）「湧別遺跡の発掘について」北方文化研究報告第13輯
- 駒井和愛編（1963）「オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡」上巻 東京大学文学部
- 齊藤武一・岩谷朝吉（1960）「東神楽14号遺跡」東神楽村郷土研究会
- 佐藤忠雄（1960）「多寄」士別市教育委員会
- 沢 四郎・鈴木徳一ほか（1960）阿寒郡鶴居村の先史時代の遺跡 一中雪裡・茂雪裡・下雪裡一 釧路博物館報Ⅷ104
- 沢 四郎（1968・a）「釧路市東釧路第Ⅱ地点発掘調査概報」釧路市教育委員会
- 沢 四郎（1968・b）「釧路地方における石刃鏃の編年の位置」新釧路市史会報2-3
- 沢 四郎（1969）「釧路川流域の先史時代」釧路叢書第11巻
- 沢 四郎（1971）「鶴居村キラコタン崎付近の遺跡踏査報告」釧路博物館報Ⅷ213
- 戸沢充則・鶴丸俊明（1968）「北海道川東羽田発見の石刃鏃とその遺跡」考古学集刊4-2
- 戸沢充則・鶴丸俊明（1971）「北海道川東羽田発見の石刃鏃とその遺跡」（第二次報告）考古学集刊4-4
- 中田幹雄（1967）「北海道先史時代編年表」日高の文化財第1集 埋蔵文化財篇
- 西 幸隆（1972）「北海道先史時代における石刃鏃文化の位置について」一研究史一先史8号
- 藤本英夫（1958）「静内田原遺跡について」せいゆう4号
- 山崎 徹（1972）「池田遺跡C地区発掘調査報告」池田町の先史時代 埋蔵文化財報告Ⅱ
- 吉崎昌一（1965）「縄文文化の発展と地域性一北海道一」日本の考古学Ⅱ 河出書房



第2図 鶴居村下幌呂遺跡A地点出土の土器



第3図 鶴居村下幌呂遺跡A地点出土の石器

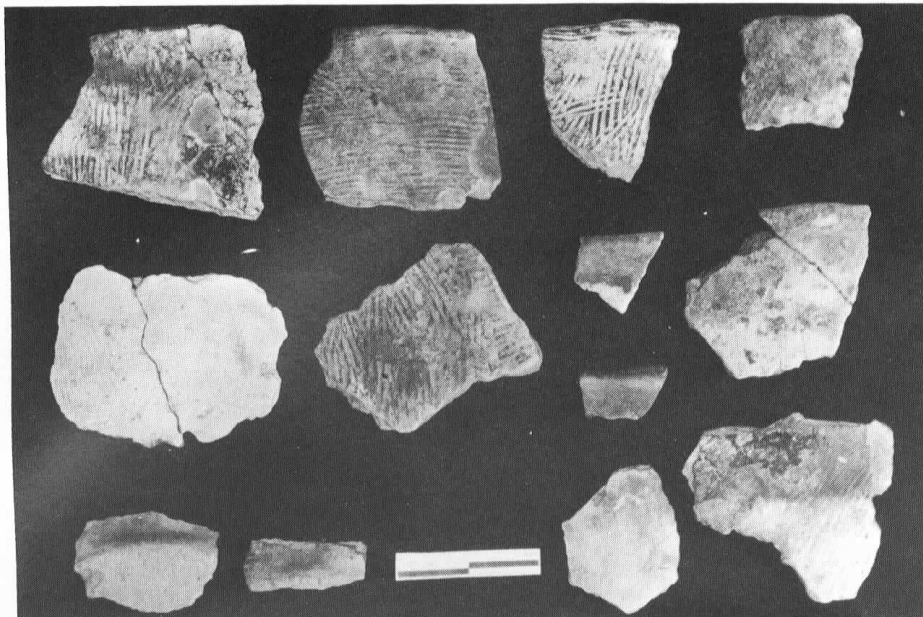


写真 1
鶴居村下幌呂遺跡 A
地点出土の土器
(表面)

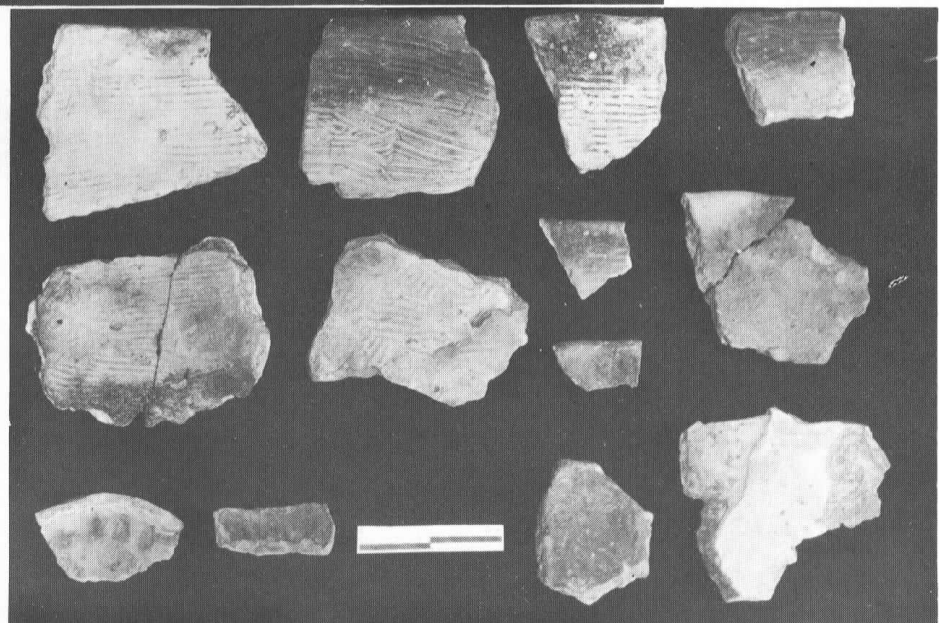


写真 2
鶴居村下幌呂遺跡 A
地点出土の土器 (写真
1 の裏面)

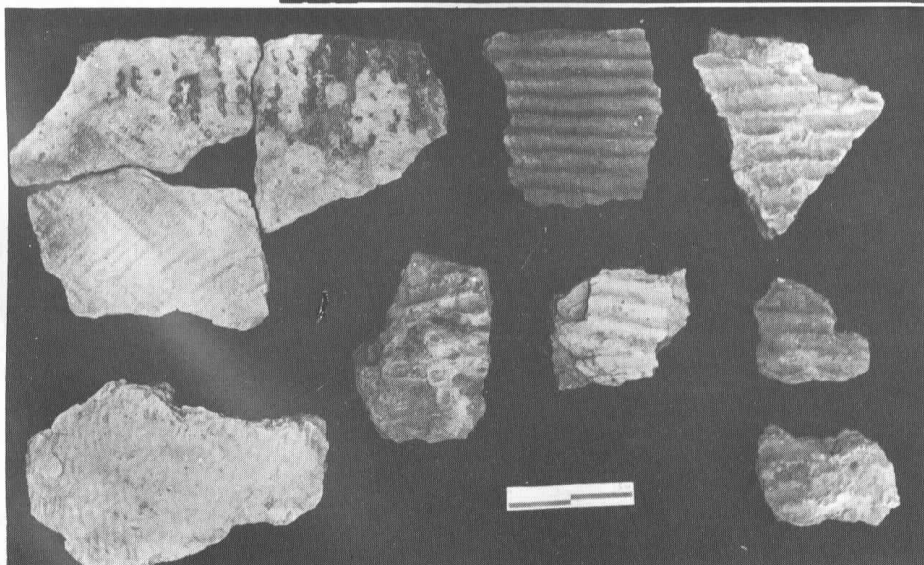


写真 3
鶴居村下幌呂遺跡 A
地点出土の土器

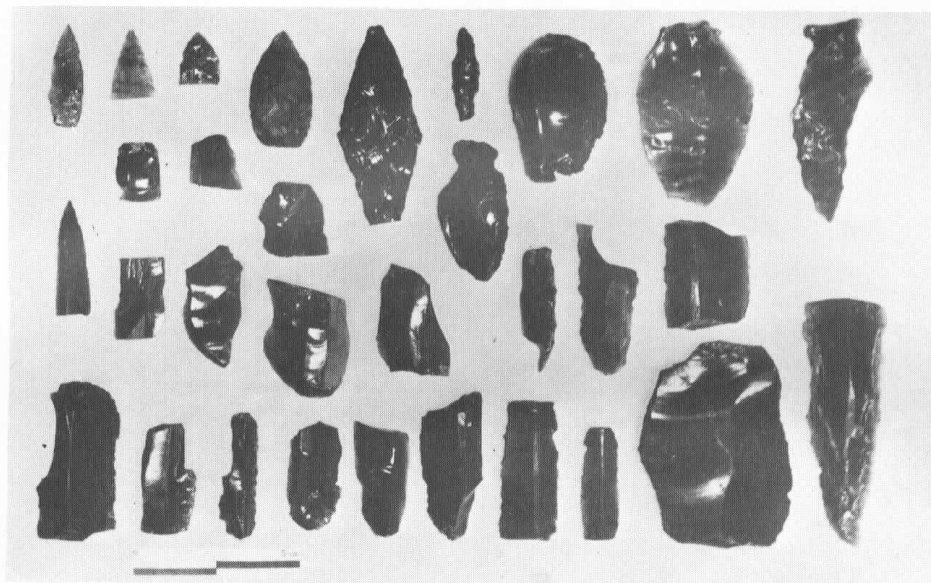


写真4 鶴居村下幌呂遺跡A地点出土の石器



写真5 鶴居村下幌呂遺跡A地点の石器(第3図36.主剥離面)
(×6)